

### 3. 子育て世帯の住宅及び住環境のニーズに係る調査

子育て世帯のニーズとして、子育て中の親が、子育てに配慮した住宅及び住環境の要素として重要・必要であると評価する項目（以下「重要項目」という。）を具体的に把握するため、ウェブアンケート調査（以下「ウェブ調査」という。）を実施した。

調査結果の分析により、子育て世帯にとっての子どもの年齢期に応じた重要項目を明らかにし、「子育て配慮住宅の計画手法」の検討に向けた視点を整理した。

#### 3. 1 ウェブ調査の内容及び実施方法

##### 3. 1. 1 調査項目の設定

参考資料1及び参考資料2に示した調査の結果を踏まえ、子育て世帯にとっての重要項目を把握するための調査項目として、以下のア) からク) の8つの視点から、表参考3.1に示す50項目を設定した。

- ア) 安全・安心【住宅に係る項目】
- イ) 健康性【住宅に係る項目】
- ウ) 子どもの健やかな成長【住宅に係る項目】
- エ) 子育ての快適【住宅に係る項目】
- オ) 地域の安全【住環境に係る項目】
- カ) 立地環境の快適性【住環境に係る項目】
- キ) 子育て支援サービス【サービス等に係る項目】
- ク) 人間関係【サービス等に係る項目】

なお、住宅としての基本性能（住宅面積、耐震性能、防火性能、省エネ性能等）は当然に備えられるべきものと考え、これら以外の子育て配慮の観点からの項目を設定した。

表参考3.1 設定した調査項目一覧

視点	調査項目(50項目)	
住宅の 安全・ 安心	1	住宅内での衝突・転倒防止の工夫がある(壁・柱の角が丸くなっている、滑りにくい床など)
	2	転落防止の工夫がある(ベランダ、階段の手すり・柵を高くするなど)
	3	指はさみ・指つめ防止の工夫がある(ドアストッパー、指つめ防止ガードがついているなど)
	4	危険箇所への侵入防止の工夫がある(浴室・階段など事故が起こりやすい場所へ子どもが勝手に進入できない)
	5	閉じ込め・締め出し防止の工夫がある(鍵の位置を高くするなど)
	6	感電防止の工夫がある(コンセントが子どもの手の届きにくい位置にあるなど)
	7	子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫がある(対面キッチン、リビング等の見通しの確保)
	8	防犯対策がある(玄関ドアの2重ロック、カメラ付きインターホン、防犯カメラ、管理人がいるなど)
	9	敷地内の自動車事故を防ぐ工夫がある(敷地内の駐車場と歩行路が植栽等で分離されている、敷地内の車道はスピードがでない構造となっているなど)
	10	備蓄倉庫がある(子どものオムツ・粉ミルク、食料・水等の災害時の生活物資などを備蓄できる)
住宅の 健康性	11	健康的な材料が使用されている(シックハウスの心配が少ない材料、調湿性のある材料の使用等)
	12	リビングや子ども部屋の日当たりや風通しが良い

表参考3.1 設定した調査項目一覧（つづき）

視点	調査項目(50項目)	
子どもの 健やかな 成長	13	キッチンの広さ・使いやすさ(子どもがお手伝いできる等)
	14	リビングの広さ・使いやすさ(子どもが遊んだり勉強したりできるスペース、収納がある等)
	15	子どもの気配が感じられる間取りの工夫がある(リビングに階段がある等)
	16	トイレの広さ・使いやすさ(親子で一緒に入ってトイレトレーニングできる等)
	17	浴室の広さ・使いやすさ(親子で一緒に入ってくつろげる等)
	18	寝室の広さ(親子で一緒に寝られる)
	19	子どもの自主性を育てる設備の工夫がある(片づけしやすい収納、使いやすいドアノブ・水栓がレバーハンドル等)
	20	子どもの個室がある(確保できる住宅の広さがある)
	21	子どもの成長に応じて間取りを簡単に換えられる(可動間仕切り等により寝室やリビングの一部を子ども部屋に変えることができる等)
	22	玄関の収納スペースが充実している(ベビーカーが置ける、広いウオークインクローゼット等)
23	土に触れられる環境にある(家庭菜園ができる庭や広いバルコニーがある等)	
子育て の快適	24	壁や床の遮音性が高い(子どもの飛び跳ねや泣き声が近隣に伝わりにくい)
	25	家事動線が効率的である(料理をしながら洗濯しやすい等)
	26	壁や床、水回りの掃除がしやすい(汚れにくい、簡単にふき取れるなど、掃除しやすい素材の使用)
	27	雨の日でも洗濯ものが干せる工夫がある(浴室乾燥機、サンルーム等)
	28	夫婦のためのスペースがある(子どもを寝かした後など、夫婦でくつろぐことのできるスペース等)
	29	親が自分の時間を楽しめるスペースがある(趣味を楽しむスペース等)
	30	親やベビーシッターに子守を頼みやすい工夫がある(寝室に施錠できる、パブリックスペースとプライベートスペースが分離された間取り等)
	31	外出時にベビーカーが利用しやすい(エレベーターがある、玄関から屋外まで段差がない等)
	32	敷地内に十分な自転車置き場がある
	33	自宅の駐車場が利用しやすい
地域の 安全	34	自然災害(地震、水害等)の危険性が低い地域に立地している
	35	住宅周辺の交通安全性が高い(車通りの激しい道路に面していない、広い歩道がある等)
	36	住宅周辺の防犯性が高い(地域ぐるみの防犯活動がある、防犯カメラがある等)
立地環境の 快適性	37	教育上ふさわしくない施設(パチンコ店・風俗店等)が住宅周辺にない
	38	子育て支援施設(保育園、幼稚園、児童館等)が近くにある
	39	小・中学校、図書館等が近くにある
	40	安心して遊ばせられる公園が近くにある
	41	駅やバス停が近くにある
	42	子どもがよく利用する病院(小児科等)が近くにある
	43	食料品・日用品のスーパー等が近くにある
	44	通勤の利便性が高い(勤務先に近い、公共交通機関が通勤に便利である等)
子育て 支援サ ービス	45	自治体の子育て支援サービスが充実している(子育てイベントの開催、子育て相談等)
	46	育児ストレス防止の自治体等の支援サービスが充実している(心の充電サービス、子どもの一時預かりサービス等)
	47	同世代の親子と交流しやすい地域・環境である(地域に集会所、つどいの広場や子育てサークルがある等)
	48	様々な世代の人と交流しやすい環境にある(地域に子どもが参加できるイベントや行事がある等)
人間関係	49	祖父母と交流しやすい環境にある(子どもの祖父母の家に近い、遠方の祖父母が泊まる部屋がある等)
	50	子どもを預けられる親族や友人等が近くにいる(急用ができた場合、自分の時間をつくるため等)

### 3. 1. 2 調査の実施方法

#### 1) 重要項目の把握方法

設定した50項目の中から、重要項目を把握する方法として、以下の方法を採用した。

##### (1) 各設定項目の重要度の評価の把握

ウェブ調査において、子育て中の親が本当に「重要・必要」と考えている重要項目を的確に抽出できるように、住居費負担（月々のローン返済額や家賃）との関係に着目し、「住居費をかけても（住居費負担が増えても）重要・必要な項目」であるか否かについて把握することとした<sup>注1)</sup>。

その際、子どもの年齢期（成長）に応じて重要項目も変化すると考えられることから、子どもの年齢期（乳児期・幼児前期、幼児後期、小学生低学年、小学生高学年、中学生の5区分。表参考3.5参照）に応じて重要項目か否かを把握することとした。また、回答する年齢期は、現在の子どもの年齢期だけでなく、子育ての経験を踏まえ、以前の年齢期についても（重要項目であったか否かを）さかのぼって回答してもらうこととした。

具体的には、表参考3.2に例示するように、表側に設定項目、表頭に子供の年齢を整列し、一つの項目について子どもの成長に応じて「住居費をかけても重要・必要」であるか否かの観点から評価してもらい、重要項目については該当する年齢期を選択・回答してもらう方法とした。年齢にかかわらず重要な項目はすべての項目にチェックをしてもらい、「重要だが費用をかけるまでではない」、「どの年齢期でも重要とは思わない」という選択肢も用意した。

表参考3.2 ウェブ調査での回答方法（例示）

設定項目	重要項目か否かの回答欄						
	子どもの年齢期別の 住居費をかけても重要・必要					重要だが、費用をかけるまでではない	どの年齢期でも重要とは思わない
	乳児期・ 幼児前期 (0～3歳)の時	幼児後期 (4～6歳)の時	小学生 低学年 (1～3年)の時	小学生 高学年 (4～6年)の時	中学生の 時		
01. 壁・柱の角が丸くなっている、滑りにくい床など、住宅内での衝突・転倒防止の工夫がある	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
02. ベランダの柵を高くするなど、転落防止の工夫がある	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
...	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

ウェブ調査の画面上、長子の年齢に応じ、該当する年齢期（長子の現在の年齢期、及びそれ以前のすべての年齢期）を表示。⇒ 該当する年齢期を回答

左記に当てはまらない場合、いずれかを回答

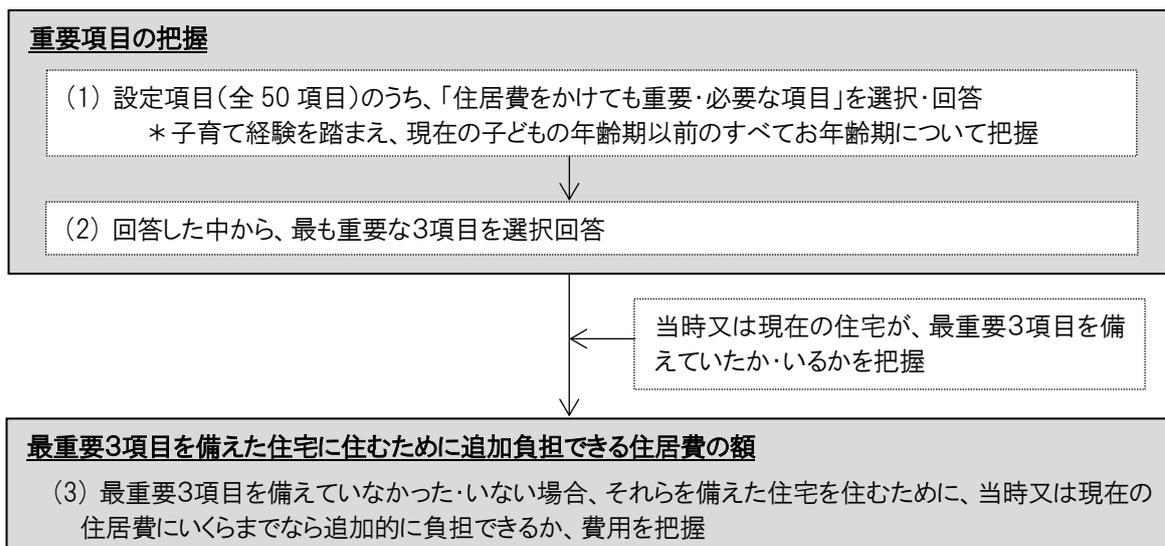
## (2) 最重要項目の把握

(1) で重要項目と回答された複数の項目の中から、最重要項目を把握するため、第1位から第3位までの重要項目を子供の年齢期ごとに選択・回答してもらうこととした。

## (3) 最重要項目を備えた住宅に住むために追加負担できる住居費の把握

当時居住していた又は現在居住している住宅が最重要項目（第1位～第3位）を満たしていない場合、それらを満たすためには当時又は現在の住居費に追加的にいくら負担できるかについて、設問を用意して把握した。追加負担額については選択肢を用意して、選択・回答してもらうこととした。

以上の調査項目の関係を図化すると、図参考3.1のようになる。



図参考3.1 重要項目の把握に係る調査項目の関係

## 2) 調査の実施方法

ウェブ調査は、スクリーニング調査と本調査で構成される。

### (1) スクリーニング調査

スクリーニング調査は、本調査の対象となる世帯等を絞り込むための調査である。

採用したウェブ調査会社の登録者について、表参考3.3に示す基礎情報、客観的実態等について回答してもらい、本調査の対象を絞り込んだ。

表参考3.3 スクリーニング調査の設問

- S Q 1: 居住地（都道府県）
- S Q 2: 同居家族
- S Q 3: 子どもの人数
- S Q 4: 長子の年齢
- S Q 5: 共働きの有無
- S Q 6: 職業（本人・回答者）
- S Q 7: 通勤時間（本人・回答者）
- S Q 8: 通勤手段（本人・回答者）
- S Q 9: 現在居住している住宅タイプ

## (2) 調査

スクリーニング調査で対象となった世帯については、本調査を実施した。

本調査では、表参考3.4に示すように、重要項目、客観的実態等を把握した。

**表参考3.4 本調査の設問**

- Q1: 子育て期間に居住する住宅に対する志向性
- Q2: 長子の年齢に応じた当時居住していた住宅タイプ(時系列で把握)
- Q3: 住居費をかけても重要・必要な項目【住戸内】
- Q4: 住居費をかけても重要・必要な項目【住宅敷地内(屋外、共用部等)】
- Q5: 住居費をかけても重要・必要な項目【住環境】
- Q6: 住居費をかけても重要・必要な項目【コミュニティ】
- Q7: [乳児・幼児前期:0～3歳] 住居費をかけても特に重要・必要だと思う項目の第1～3位
- Q8: [乳児・幼児前期:0～3歳] 重要3項目を備えた住宅の居住経験の有無
- Q9: [乳児・幼児前期:0～3歳] (重要3項目を備えた住宅の居住経験なし対象)追加居住費
- Q10: [幼児後期:4～6歳] 住居費をかけても特に重要・必要だと思う項目の第1～3位
- Q11: [幼児後期:4～6歳] 重要3項目を備えた住宅の居住経験の有無
- Q12: [幼児後期:4～6歳] (重要3項目を備えた住宅の居住経験なし対象)追加居住費
- Q13: [小学生低学年:1～3年] 住居費をかけても特に重要・必要だと思う項目の第1～3位
- Q14: [小学生低学年:1～3年] 重要3項目を備えた住宅の居住経験の有無
- Q15: [小学生低学年:1～3年] (重要3項目を備えた住宅の居住経験なし対象)追加居住費
- Q16: [小学生高学年:4～6年] 住居費をかけても特に重要・必要だと思う項目の第1～3位
- Q17: [小学生高学年:4～6年] 重要3項目を備えた住宅の居住経験の有無
- Q18: [小学生高学年:4～6年] (重要3項目を備えた住宅の居住経験なし対象)追加居住費
- Q19: [中学生] 住居費をかけても特に重要・必要だと思う項目の第1～3位
- Q20: [中学生] 重要3項目を備えた住宅の居住経験の有無
- Q21: [中学生] (重要3項目を備えた住宅の居住経験なし対象)追加居住費
- Q22: 現在の住宅の間取り
- Q23: 現在の住宅の延べ床面積
- Q24: [賃貸住宅対象] 建物階数
- Q25: [賃貸住宅対象] 建物構造
- Q26: 住居費
- Q27: 住居費負担感
- Q28: 世帯年収
- Q29: 親の家までの時間
- Q30: 現在居住している住宅を選択した際に重視した項目
- Q31: 現在居住している住宅を選択した際に重視した項目のうち、最も重要な項目の第1～3位
- Q32: 現在の住まい(住宅や住環境など全般)の満足度
- Q33: 現在の住まいの項目別(Q30の項目)の満足度

### 3. 1. 3 調査対象のサンプル設定

子育て世帯のライフステージ、居住している住宅タイプ、居住地域等によるニーズの差異を把握できるようにサンプル数を設定した。

#### 1) 調査対象世帯の設定

##### (1) 対象とする基本世帯型

調査対象の世帯は、18歳未満の子どものいる世帯で、「親（ひとり親を含む）と子どものみからなる世帯」とした。祖父母が同居する3世代世帯は、異なる居住ニーズがあると考えられるため対象外とした。

##### (2) 対象とする子どもの年齢期（世帯のライフステージ）：5分類

子どもの年齢により重要項目は異なることが考えられること、生活スタイルも大きく異なることが想定される。また、子育て世帯は、住宅の取得等の住まいを変えるきっかけとして、長子の成長（例えば、保育園入園、小学校入学等のタイミング）にあわせて行うことが考えられる。このため、子ども（長子）の年齢期を表参考3.5に示すとおり区分し、世帯のライフステージを設定した。

なお、中学生以上になると配慮事項はあまり変化しないと考えたため、中学生と高校生を一括して扱っている。

表参考3.5 子どもの年齢期に応じた世帯のライフステージの設定

子ども(長子) の年齢	1	乳児期・幼児前期(0～3才)
	2	幼児後期(4～6才)
	3	小学生低学年(1～3年生)
	4	小学生高学年(4～6年生)
	5	中学生～

##### (3) 対象とする住宅タイプ：4分類

戸建住宅・共同住宅、持家・賃貸の住宅の建て方・所有形態により重要項目は異なると想定されることから、現在居住している住宅タイプを表参考3.6のように区分した。

なお、公的賃貸住宅（公営住宅、公社住宅、UR賃貸住宅等）、社宅等の居住者は、限定的な選択肢や条件の中から住宅の選択・確保をしている可能性が高いため除外した。また、賃貸・戸建住宅は登録モニター数が少ないことが想定されたため、参考として扱うこととした。

表参考3.6 住宅タイプの設定

戸建住宅	1	持家・戸建住宅
	4	賃貸・戸建住宅【参考】
共同住宅	2	持家・共同住宅（マンション）
	3	賃貸・共同住宅

##### (4) 対象とする居住地域：2分類

地方圏と大都市圏など、居住地域により重要になる項目は異なると想定されることから、現在居住している地域を大都市圏・地方圏に区分した。

大都市圏及び地方圏の対象都道府県については、大まかな傾向を把握するため、表参考3.7の

ように設定した。

**表参考3.7 居住地域の設定**

大都市圏	1	(首都圏) 東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県 (関西圏) 大阪府
地方圏	2	上記以外の 42 道府県

## 2) サンプル数の設定

1) を踏まえ、居住地域ごと、住宅タイプごと、子ども(長子)の年齢期に応じたライフステージごとに30のセグメントを設定し、表参考3.8のとおり、目標とするサンプル数を設定した。

また、これらのセグメントとは別に戸建て・賃貸については、ライフステージ(長子年齢)に可能な限りのサンプルを収集することとした。

**表参考3.8 対象セグメントごとの目標サンプル数**

セグメント	居住地域	住宅タイプ	ライフステージ(長子年齢)	目標サンプル数
1	大都市圏	持家・戸建住宅	0～3歳	120
2			4～6歳	120
3			小学生(1～3年)	120
4			小学生(4～6年)	120
5			中学生～	120
6		持家・共同住宅	0～3歳	120
7			4～6歳	120
8			小学生(1～3年)	120
9			小学生(4～6年)	120
10			中学生～	120
11		賃貸・共同住宅	0～3歳	200
12			4～6歳	200
13			小学生(1～3年)	200
14			小学生(4～6年)	200
15			中学生～	200
16	地方圏	持家・戸建住宅	0～3歳	120
17			4～6歳	120
18			小学生(1～3年)	120
19			小学生(4～6年)	120
20			中学生～	120
21		持家・共同住宅	0～3歳	120
22			4～6歳	120
23			小学生(1～3年)	120
24			小学生(4～6年)	120
25			中学生～	120
26		賃貸・共同住宅	0～3歳	200
27			4～6歳	200
28			小学生(1～3年)	200
29			小学生(4～6年)	200
30			中学生～	200
合計				4,400

### 3. 1. 4 調査の実施

ウェブ調査においてスクリーニング調査、本調査を一体的に実施した。調査期間は、2016年12月19日～12月26日である。得られたサンプル数を表参考3.9に示す。設定した目標サンプルのうち、セグメント15の「大都市圏の賃貸共同住宅・長子が中学生～」のみ目標サンプル数を確保できなかったが、その他のセグメントは目標サンプル数を得た。参考として収集した戸建住宅・賃貸を含めて、全5,042サンプルを得た。

表参考3.9 得られたサンプル数

セグメント	居住地域	住宅タイプ	ライフステージ(長子年齢)	目標サンプル数	得られたサンプル数
1	大都市圏	持家・戸建住宅	0～3歳	120	120
2			4～6歳	120	120
3			小学生(1～3年)	120	120
4			小学生(4～6年)	120	120
5			中学生～	120	120
6		持家・共同住宅	0～3歳	120	120
7			4～6歳	120	120
8			小学生(1～3年)	120	120
9			小学生(4～6年)	120	120
10			中学生～	120	120
11		賃貸・共同住宅	0～3歳	200	200
12			4～6歳	200	200
13			小学生(1～3年)	200	200
14			小学生(4～6年)	200	200
15			中学生～	200	186
	賃貸・戸建住宅 【参考】	0～3歳	—	29	
		4～6歳	—	40	
		小学生(1～3年)	—	48	
		小学生(4～6年)	—	44	
		中学生～	—	34	
16	地方圏	持家・戸建住宅	0～3歳	120	120
17			4～6歳	120	120
18			小学生(1～3年)	120	120
19			小学生(4～6年)	120	120
20			中学生～	120	120
21		持家・共同住宅	0～3歳	120	120
22			4～6歳	120	120
23			小学生(1～3年)	120	120
24			小学生(4～6年)	120	120
25			中学生～	120	120
26		賃貸・共同住宅	0～3歳	200	200
27			4～6歳	200	200
28			小学生(1～3年)	200	200
29			小学生(4～6年)	200	200
30			中学生～	200	200
	賃貸・戸建住宅 【参考】	0～3歳	—	87	
		4～6歳	—	81	
		小学生(1～3年)	—	109	
		小学生(4～6年)	—	97	
		中学生～	—	87	
合計				4,400	5,042

## 3. 2 子どもの年齢期別の重要項目の分析

ウェブ調査で得られたデータをもとに、子どもの年齢期別に於じた重要項目の特徴について分析した。分析結果を以下に示す。

### 3. 2. 1 重要度3区分の比率を用いたクラスター分析

設定した調査項目 50 項目について、各年齢期において「住居費をかけても重要・必要と思う」、「重要だが住居費をかけるまではない」、「重要とは思わない」の重要度3区分の比率を求め、これを変数とした「非階層クラスター分析」を行い、類型化を行った。なお、本分析では調査項目間の階層的な構造を説明することは重要でないことから、非階層クラスター分析を採用した。また、クラスター数の指定にあたっては、変数の数や分布特性を想定した。

クラスター分析の結果、4つのクラスター（Ⅰ～Ⅳ）に類型された。各クラスターの特徴を中心のスコア（重要度3区分の比率）で説明したのが表参考3.10である。表中、「◎」が最も高いスコア、「○」が2番目に高いスコア、「×」が最も低いスコアを示している。

類型Ⅰは「住居費をかけても重要・必要である」の比率が最も高い類型であり、逆に、類型Ⅳは「重要ではない」の比率が最も高い類型である。

表参考3.10 重要度からみた各クラスターの特徴

重要度 クラスター	住居費をかけても 重要・必要である	重要だが住居費を かけるまではない	重要ではない
Ⅰ	◎	○	×
Ⅱ	○	◎	×
Ⅲ	×	◎	○
Ⅳ	×	○	◎

### 3. 2. 2 「住居費をかけても重要・必要」の割合が最も高い項目

表参考3.11は、各調査項目についての重要度の類型化した結果を示したものである。各調査項目について子どもの年齢期別に、表参考3.10に示した4つのクラスターのいずれに該当するかをⅠ～Ⅳの数字で示している。なお、表中の★印は、「住居費をかけても重要・必要だと思う」の上位1位から3位までの選択率を、1位「3点」、2位「2点」、3位「1点」、採択なし「0点」でスコア化した結果で、上位5位までの項目を示している。

このうち、「住居費をかけても重要・必要」の割合が最も高いクラスターⅠに着目し、子どもの年齢期別に該当する項目をみる。

#### (1) 乳児期・幼児前期

16項目がクラスターⅠに該当し、住宅・地域の安全や住宅・立地環境の快適に関して重要項目が多岐にわたる。最も重要項目としての評価が多いのがこの乳児期・幼児前期となる。

住宅の安全・安心に関しては「2:転落防止の工夫がある」、「3:指はさみ・指つめ防止の工夫がある」、「4:危険箇所への侵入防止の工夫がある」、「7:子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫がある」、「8:(住宅の)防犯対策がある」が該当する。住宅の健康性に関しては「11:健康的な材料が使用されている」、「12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通しが良い」が該当する。子ども

表参考 3.11 各調査項目の重要度の類型結果（子どもの年齢期別）

調査項目(50 項目)		子どもの年齢期					
		乳児・ 幼児 前期	幼児 後期	小学生 低学年	小学生 高学年	中学生	
住宅 の 安 全 ・ 安 心	1	住宅内での衝突・転倒防止の工夫がある(壁・柱の角が丸くなっている、滑りにくい床など)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	2	転落防止の工夫がある(ベランダ、階段の手すり・柵を高くするなど)	Ⅰ ★	Ⅰ ★	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ
	3	指はさみ・指つめ防止の工夫がある(ドアストッパー、指つめ防止ガードがついているなど)	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	4	危険箇所への侵入防止の工夫がある(浴室・階段等事故が起こりやすい場所へ子どもひとりで入れない)	Ⅰ ★	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	5	閉じ込め・締め出し防止の工夫がある(鍵の位置を高くするなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	6	感電防止の工夫がある(コンセントが子どもの手の届きにくい位置にあるなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	7	子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫がある(対面キッチン、リビングから水回りが見通せるなど)	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	8	防犯対策がある(玄関ドアの 2 重ロック、カメラ付きインターホン、防犯カメラ、管理人がいるなど)	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ ★	Ⅰ ★	Ⅰ ★
	9	敷地内の自動車事故を防ぐ工夫がある(敷地内の駐車場と歩行路が植栽で分離されているなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	10	備蓄倉庫がある(子どものオムツ・粉ミルク、食料・水など、災害時の生活物資などを備蓄できる)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
住宅 の 健 康 性	11	健康的な材料が使用されている(調湿性のある自然素材の使用、シックハウスの心配が少ないなど)	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
	12	リビングや子ども部屋の日当たりや風通しが良い	Ⅰ ★	Ⅰ ★	Ⅰ ★	Ⅰ ★	Ⅰ ★
子 ど も の 健 や か な 成 長	13	キッチンの広さ・使いやすさ(子どもがお手伝いできるなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	14	リビングの広さ・使いやすさ(子どもが遊んだり勉強したりできるスペース、収納があるなど)	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ ★	Ⅱ ★	Ⅲ
	15	子どもの気配が感じられる間取りの工夫がある(リビングに階段があるなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	16	トイレの広さ・使いやすさ(親子で一緒に入ってトイレトレーニングできるなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ
	17	浴室の広さ・使いやすさ(親子で一緒に入ってくつろげるなど)	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	18	寝室の広さ(親子で一緒に寝られる)	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	19	子どもの自主性を育てる設備の工夫がある(片づけしやすい収納、使いやすいドアノブ・水栓レバーなど)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	20	子どもの個室がある(確保できる住宅の広さがある)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ ★	Ⅰ ★
	21	子どもの成長に応じて間取りを簡単に換えられる(寝室やリビングの一部を子ども部屋に変えるなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	22	玄関の収納スペースが充実している(ベビーカーが置ける、広いウォークインクローゼットなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	23	土に触れられる環境にある(家庭菜園ができる庭や広いバルコニーがあるなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ
子 育 て の 快 適	24	壁や床の遮音性が高い(子どもの飛び跳ねや泣き声が近隣に伝わりにくい)	Ⅰ ★	Ⅰ ★	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ
	25	家事動線が効率的である(料理をしながら洗濯しやすいなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ

表参考3.11 各調査項目の重要度の類型結果（子どもの年齢期別）（つづき）

調査項目(50項目)		子どもの年齢期					
		乳児・ 幼児 前期	幼児 後期	小学生 低学年	小学生 高学年	中学生	
子育ての 快適	26	壁や床、水回りの掃除がしやすい(汚れにくい、簡単にふき取れるなど、掃除しやすい素材の使用)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	27	雨の日でも洗濯ものが干せる工夫がある(浴室乾燥機、サンルームなど)	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	28	夫婦のためのスペースがある(子どもを寝かした後など、夫婦でつくることのできるスペースなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	29	親が自分の時間を楽しめるスペースがある(趣味を楽しむスペースなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ
	30	親やベビーシッターに子守を頼みやすい工夫がある(寝室に施錠できる、私的空間を分離した間取りなど)	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
	31	外出時にベビーカーが利用しやすい(エレベーターがある、玄関から屋外まで段差がないなど)	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	32	敷地内に十分な自転車置き場がある	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
	33	自宅の駐車場が利用しやすい	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ
地域の 安全	34	自然災害(地震、水害など)の危険性が低い地域に立地している	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
	35	住宅周辺の交通安全性が高い(車通りの激しい道路に面していない、広い歩道があるなど)	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ
	36	住宅周辺の防犯性が高い(地域ぐるみの防犯活動がある、防犯カメラがあるなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ★
立地 環境の 快適性	37	教育上ふさわしくない施設(パチンコ店・風俗店など)が住宅周辺にない	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
	38	子育て支援施設(保育園、幼稚園、児童館など)が近くにある	Ⅰ	Ⅰ★	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	39	小・中学校、図書館などが近くにある	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ★	Ⅰ★	Ⅰ★
	40	安心して遊ばせられる公園が近くにある	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ★	Ⅰ	Ⅲ
	41	駅やバス停が近くにある	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ
	42	子どもがよく利用する病院(小児科など)が近くにある	Ⅰ★	Ⅰ★	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
	43	食料品・日用品のスーパー等が近くにある	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ
	44	通勤の利便性が高い(勤務先に近い、公共交通機関が通勤に便利であるなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ
子育て 支援サ ービス	45	自治体の子育て支援サービスが充実している(子育てイベントの開催、子育て相談など)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	46	育児ストレス防止の自治体等の支援サービスが充実している(心の充電サービス、子ども預かりなど)	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	47	同世代の親子と交流しやすい地域・環境である(地域にキッズルームや子育てサークルがあるなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ
	48	様々な世代の人と交流しやすい環境にある(地域に子どもが参加できるイベントや行事があるなど)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
人間 関係	49	祖父母と交流しやすい環境にある(子どもの祖父母の家に近い、遠方の祖父母が泊まる部屋があるなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
	50	子どもを預けられる親族や友人などが近くにいる(急用ができた場合、自分の時間をつくるためなど)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ
クラスターⅠ(クラスターⅡ)の該当項目数		16(20)	11(25)	12(19)	9(7)	5(8)	

注)表中、クラスターⅠは濃い網掛け、クラスターⅡは薄い網掛けで表示している。

の健やかな成長や子育ての快適に係る住宅機能・設備に関しては「17：浴室の広さ・使いやすさ」、「18：寝室の広さ」、「24：壁や床の遮音性が高い」が該当する。また、地域の安全に関して「34：自然災害の危険性が低い地域に立地」、「35：住宅周辺の交通安全性が高い」が該当する。さらに、立地環境の快適性に関して「38：子育て支援施設が近くにある」、「40：安心して遊ばせられる公園が近くにある」、「42：子どもがよく利用する病院が近くにある」、「43：食料品・日用品のスーパー等が近くにある」が該当する。

## （２）幼児後期

11項目がクラスターⅠに該当する。乳児期・幼児前期と比較すると、「3：指はさみ・指つめ防止の工夫がある」、「4：危険箇所への侵入防止の工夫がある」、「7：子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫がある」、「11：健康的な材料が使用されている」、「17：浴室の広さ・使いやすさ」の重要性はやや低下し、クラスターⅡになる。代わって、「14：リビングの広さ・使いやすさ」がクラスターⅠとなる。リビングは幼児後期から（小学校低学年にかけて）遊びや宿題をする場所としても活用されるため重視される。その他の項目は、乳児期・幼児前期と同様の重要評価である。

## （３）小学生低学年

12項目がクラスターⅠに該当する。全体的な傾向は幼児後期と類似しているが、子どもの就寝が独立し始める時期であるため「18：（親子で一緒に寝られる）寝室の広さ」はクラスターⅡとなる。代わって、子どもひとりでの外出の機会や行動範囲も広がることから、「36：住宅周辺の防犯性が高い」がクラスターⅠとなり重要性が増加する。また、小学校入学を機に「小学校、図書館などが近くにある」の重要性も増加する。

## （４）小学生高学年

クラスターⅠに該当するのは9項目に減少する。「14：リビングの広さ・使いやすさ」、「24：壁や床の遮音性が高い」、「42：子どもがよく利用する病院が近くにある」はクラスターⅡとなる。また、「2：転落防止の工夫」はクラスターⅢとなり、重要度が低下する。代わって、「20：子どもの個室がある」がクラスターⅠとなり重要性が高まる。

## （５）中学生

クラスターⅠに該当は5項目とさらに減少する。子どもの成長に伴い「35：住宅周辺の交通安全性が高い」、「36：住宅周辺の防犯性が高い」、「40：安心して遊ばせられる公園が近くにある」、「43：食料品・日用品のスーパー等が近くにある」がクラスターⅡとなる。

以上をまとめると、親（保護者）が子育てにおいて「住居費をかけても重要・必要」と考える項目の特徴は次のようになる。

- ① 「リビングや子ども部屋の日当たりや風通し」、「地域の災害安全性」は全年齢期に共通に重要と評価される。
- ② 重要項目は乳児・幼児期で特に多く、住宅や住環境の安全・快適に関する多岐の項目にわたる。
- ③ 子どもの年齢（成長）に応じて、重要項目の内容は変化する。小学生低学年までは住まいや居住環境の安全や快適に係る項目が中心であるが、小学生高学年以降は子ども部屋の確保（住まいの広さ）や教育機関への近接性が重視される。

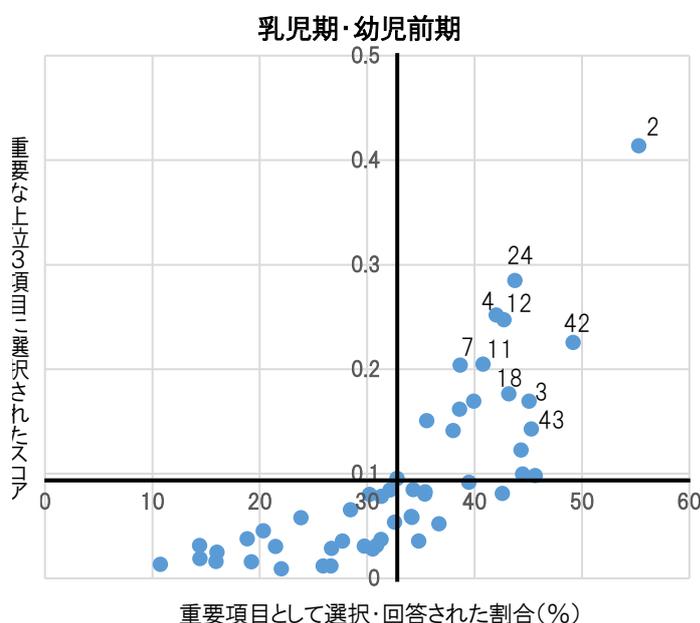
### 3. 2. 3 「住居費をかけても重要・必要」の上位評価項目

#### 1) 全住宅での子どもの年齢期別の傾向

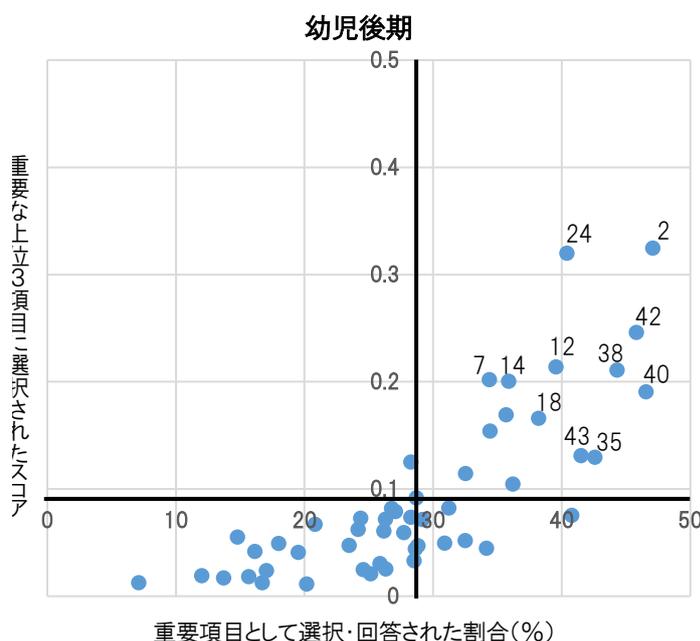
「住居費をかけても重要・必要」と評価された重要項目については、特に重要な上位3位までの項目の回答も求めた。

各調査項目について重要度が上位3位までに選択されたスコアを計算（1位3点、2位2点、3位1点、採択なし0点）し、各調査項目の重要項目として選択・回答された割合との関係を散布図で示したものが図参考3.2～図参考3.6である。子どもの年齢期ごとに図化して示している。

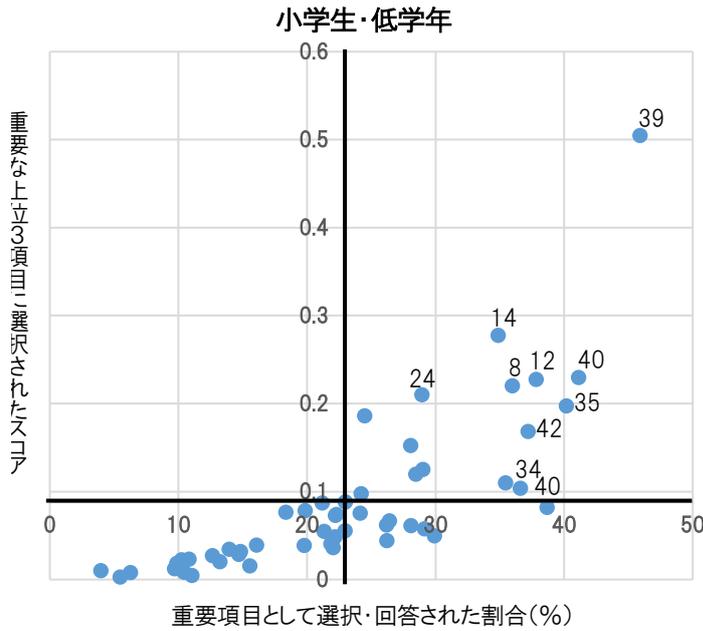
図中、縦軸は重要な上位3項目に選択されたスコア、横軸は重要項目として選択・回答された割合を示している。また、黒太線は全項目の平均値の水準を示しており、右上に位置する項目ほど重要度が高い項目となる。図中の数字は表参考3.11に示す調査項目の番号である。



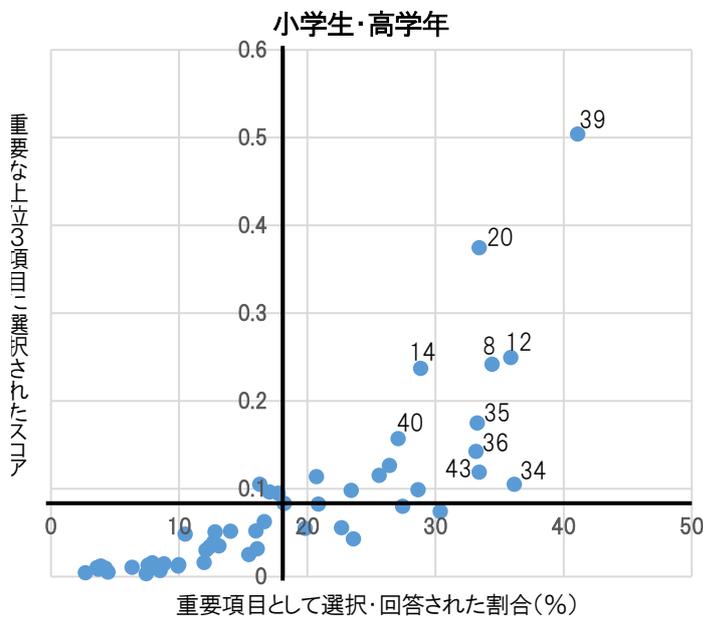
図参考3.2 【乳児期・幼児前期】  
重要な上位3項目に選択されたスコア  
と重要項目として選択・回答された割合の散布図



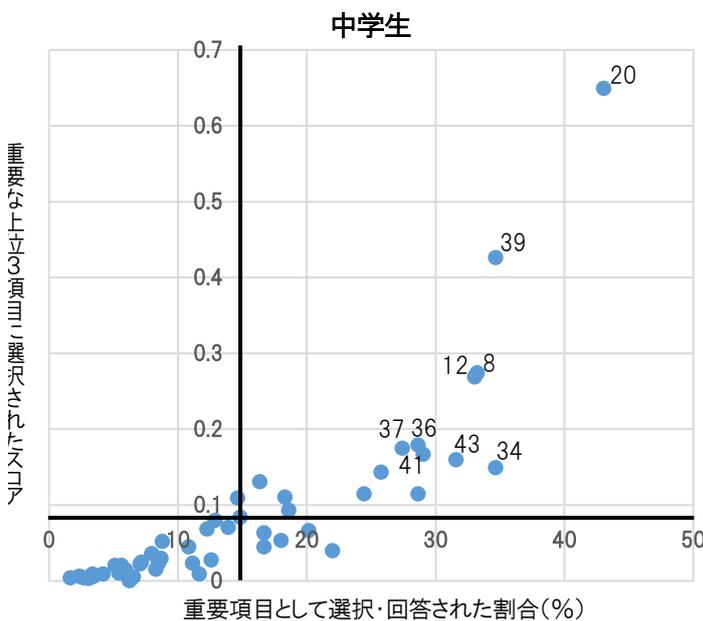
図参考3.3 【幼児後期】  
重要な上位3項目に選択されたスコア  
と重要項目として選択・回答された割合の散布図



図参考3.4 【小学生低学年】  
重要な上位3項目に選択されたスコア  
と重要項目として選択・回答された割合  
の散布図



図参考3.5 【小学生高学年】  
重要な上位3項目に選択されたスコア  
と重要項目として選択・回答された割合  
の散布図



図参考3.6 【中学生】  
重要な上位3項目に選択されたスコア  
と重要項目として選択・回答された割合  
の散布図

全住宅での傾向をみると、「12：リビングや子供部屋の日当たりや風通しが良い」はすべての子どもの年齢期で上位の重要項目に挙げられるが、子どもの年齢期別には次の傾向が認められる。

### (1) 乳児・幼児前期

「2：転落防止の工夫」が最も重要と評価される。ついで、「24：壁や床の遮音性が高い」、「4：危険箇所への侵入防止の工夫」、「12：リビングや子ども部屋の日当たりや風通しが良い」、「42：子どもがよく利用する病院が近くにある」となる。

### (2) 幼児後期

類似の傾向であるが、「38：子育て支援施設が近くにある」、「40：安心して遊ばせられる公園が近くにある」の重要度も高まる。

### (3) 小学生低学年

「39：小学校、図書館などが近くにある」の重要度が圧倒的に高くなる。ついで、「14：リビングの広さ・使いやすさ」、「40：安心して遊ばせられる公園が近くにある」、「12：リビングや子ども部屋の日当たりや風通しが良い」、「8：(住宅の)防犯対策がある」も相対的に高くなる。

### (4) 小学生高学年

小学生高学年になると、「39：小学校、図書館などが近くにある」について、「20：子どもの個室がある」の重要度が高くなる。その他の傾向は小学生低学年と概ね同様である。

### (5) 中学生

中学生になると、「20：子どもの個室がある」の重要度が最も高くなり、ついで「中学校、図書館などが近くにある」となる。この両者が他の項目に比べて圧倒的に高いのが特徴である。

以上をまとめると、乳児期・幼児期ともに最も重要と評価されるのは、第1位が「住戸内の転落防止」、第2位は「遮音性の高さ」となる。

小学校低学年・高学年になると「小・中学校が近い」が第1位となり、子どもひとりでの外出も増加し、子どもの行動範囲が広がることから「住戸の防犯対策」も上がってくる。

中学生になると、「子どもの個室」が第1位となるが、「住戸内や住宅周辺の防犯対策」も重要視されるようになる。

## 2) 重要な上位3項目の住宅タイプ別の傾向

重要上位3項目として選択されたスコアの第1位から第5位までの項目を整理して示したのが表参考3.12である。全住宅での順位と住宅タイプ別の順位を示している。表中、網掛けの項目は全住宅と比べて特徴的な項目を示しており、括弧内の数字は得られたスコアである。

全住宅での傾向は上記1)で指摘したとおりであるが、全住宅と比較した住宅タイプ別の特徴的な傾向を整理すると次の点が指摘できる。

### (1) 持家・戸建住宅

乳幼児期から小学校低学年までは、「7：子供の様子を把握しやすい間取りの工夫がある」が挙げられ、中学生になると「15：子どもの気配が感じられる間取りの工夫」が上位となる。また、「14：リビングが広さ・使いやすさ」も幼児期から小学校まで上位に挙げられている。持家・戸建住宅では、住宅の広さや間取り上の工夫が特に重視される傾向が読み取れる。また、乳児・幼児前期では「11：健康的な材料の使用」も重視される。

表参考3.12 重要な上位3項目として選択・回答されたスコアの第1位から第5位

対象	順位	子どもの年齢期				
		乳児期・ 幼児期前期	幼児後期	小学生低学年	小学生高学年	中学生
全住宅	第1位	2:転落防止の工夫(0.414)	2:転落防止の工夫(0.324)	39:小・中学校などが近い(0.505)	39:小・中学校などが近い(0.504)	20:子どもの個室がある(0.649)
	第2位	24:遮音性が高い(0.285)	24:遮音性が高い(0.320)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.278)	20:子どもの個室がある(0.374)	39:小・中学校などが近い(0.426)
	第3位	4:危険箇所への侵入防止の工夫(0.252)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.246)	40:安心して遊ばせられる公園が近くにある(0.230)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.249)	8:防犯対策がある(0.274)
	第4位	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.247)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.214)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.227)	8:防犯対策がある(0.242)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.269)
	第5位	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.226)	38:子育て支援施設が近くにある(0.211)	8:防犯対策がある(0.220)	36:住宅周辺の防犯性が高い(0.237)	36:住宅周辺の防犯性が高い(0.179)
持家・戸建て住宅	第1位	2:転落防止の工夫(0.414)	7:子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫(0.277)	39:小・中学校などが近い(0.439)	20:子どもの個室がある(0.403)	20:子どもの個室がある(0.713)
	第2位	4:危険箇所への侵入防止の工夫(0.277)	2:転落防止の工夫(0.267)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.350)	39:小・中学校などが近い(0.387)	39:小・中学校などが近い(0.350)
	第3位	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.256)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.252)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.223)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.313)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.260)
	第4位	7:子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫(0.246)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.225)	40:安心して遊ばせられる公園が近くにある(0.209)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.251)	15:子どもの気配が感じられる間取りの工夫(0.224)
	第5位	11:健康的な材料の使用(0.223)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.2036)	7:子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫(0.205)	8:防犯対策がある(0.178)	8:防犯対策がある(0.161)
賃貸・戸建て住宅	第1位	2:転落防止の工夫(0.500)	2:転落防止の工夫(0.332)	39:小・中学校などが近い(0.439)	39:小・中学校などが近い(0.498)	20:子どもの個室がある(0.877)
	第2位	4:危険箇所への侵入防止の工夫(0.360)	24:遮音性が高い(0.309)	20:子どもの個室がある(0.267)	20:子どもの個室がある(0.433)	39:小・中学校などが近い(0.526)
	第3位	24:遮音性が高い(0.258)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.252)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.248)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.292)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.395)
	第4位	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.225)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.209)	35:住宅周辺の交通安全性が高い(0.248)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.227)	43:食料品・日用品のスーパー等が近くにある(0.193)
	第5位	18:寝室の広さ(0.213)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.196)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.223)	8:防犯対策がある(0.210)	36:住宅周辺の防犯性が高い(0.175)

表参考3.12 重要な上位3項目として選択・回答されたスコアの第1位から第5位（つづき）

対象	順位	子どもの年齢期				
		乳児期・ 幼児期前期	幼児後期	小学生低学年	小学生高学年	中学生
持家・ 共同住宅 (マンション)	第1位	2:転落防止の工夫(0.419)	2:転落防止の工夫(0.362)	39:小・中学校などが近い(0.538)	39:小・中学校などが近い(0.551)	20:子どもの個室がある(0.603)
	第2位	24:遮音性が高い(0.339)	24:遮音性が高い(0.338)	8:防犯対策がある(0.315)	8:防犯対策がある(0.345)	8:防犯対策がある(0.427)
	第3位	8:防犯対策がある(0.239)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.276)	40:安心して遊ばせられる公園が近くにある(0.286)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.251)	39:小・中学校などが近い(0.415)
	第4位	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.236)	38:子育て支援施設が近くにある(0.264)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.267)	40:安心して遊ばせられる公園が近くにある(0.162)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.282)
	第5位	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.233)	8:防犯対策がある(0.249)	24:遮音性が高い(0.246)	24:遮音性が高い(0.115)	37 教育上ふさわしくない施設が近くでない(0.201)
賃貸・ 共同住宅 (RC造)	第1位	2:転落防止の工夫(0.443)	24:遮音性が高い(0.399)	39:小・中学校などが近い(0.531)	39:小・中学校などが近い(0.547)	20:子どもの個室がある(0.542)
	第2位	24:遮音性が高い(0.324)	2:転落防止の工夫(0.347)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.285)	20:子どもの個室がある(0.318)	39:小・中学校などが近い(0.377)
	第3位	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.282)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.279)	24:遮音性が高い(0.274)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.298)	8:防犯対策がある(0.288)
	第4位	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.272)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.272)	8:防犯対策がある(0.254)	8:防犯対策がある(0.266)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.258)
	第5位	4:危険箇所への侵入防止の工夫(0.231)	38:子育て支援施設が近くにある(0.253)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.246)	36:住宅周辺の防犯性が高い(0.215)	36:住宅周辺の防犯性が高い(0.242)
賃貸・ 共同住宅 (低層/ 木造・S造等)	第1位	2:転落防止の工夫(0.390)	24:遮音性が高い(0.386)	39:小・中学校などが近い(0.490)	39:小・中学校などが近い(0.563)	20:子どもの個室がある(0.607)
	第2位	24:遮音性が高い(0.303)	2:転落防止の工夫(0.306)	24:遮音性が高い(0.278)	20:子どもの個室がある(0.372)	39:小・中学校などが近い(0.586)
	第3位	4:危険箇所への侵入防止の工夫(0.262)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.238)	14:リビングの広さ・使いやすさ(0.278)	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.213)	8:防犯対策がある(0.293)
	第4位	12:リビングや子ども部屋の日当たりや風通し(0.227)	40:安心して遊ばせられる公園が近くにある(0.207)	35:住宅周辺の交通安全性が高い(0.232)	35:住宅周辺の交通安全性が高い(0.202)	43:食料品・日用品のスーパーが近くにある(0.221)
	第5位	7:子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫(0.217)	7:子どもの様子を把握しやすい間取りの工夫(0.200)	40:安心して遊ばせられる公園が近くにある(0.203)	42:子どもがよく利用する病院が近くにある(0.191)	36:住宅周辺の防犯性が高い(0.186)

注)表中、網掛けは全住宅の順位に比べて特徴的な傾向が認められる項目を示している。

## (2) 賃貸・戸建住宅

乳児期・幼児前期では「18：寝室の広さ」第5位に挙げられ、幼児後期から小学生にかけては「14：リビングが広さ・使いやすさ」も上位となる。また、持家・戸建てと比べると、小学生低学年で「35：住宅周辺の交通安全性」、中学生で「43：スーパー等が近くにある」の住環境も重視される。

## (3) 持家・共同住宅

ひとりで行動する機会が増える小学生低学年以降になると、「8：防犯対策がある」が第2位となり、高い傾向にある。また、乳幼児期に加え、小学校の時期においても「24：遮音性が高い」が第5位に挙げられており、共同住宅としての性格上、「遮音性」が重視される傾向にある。中学生では「37：教育上ふさわしくない施設が近くにない」も第5位に挙げられている。

## (4) 賃貸・共同住宅

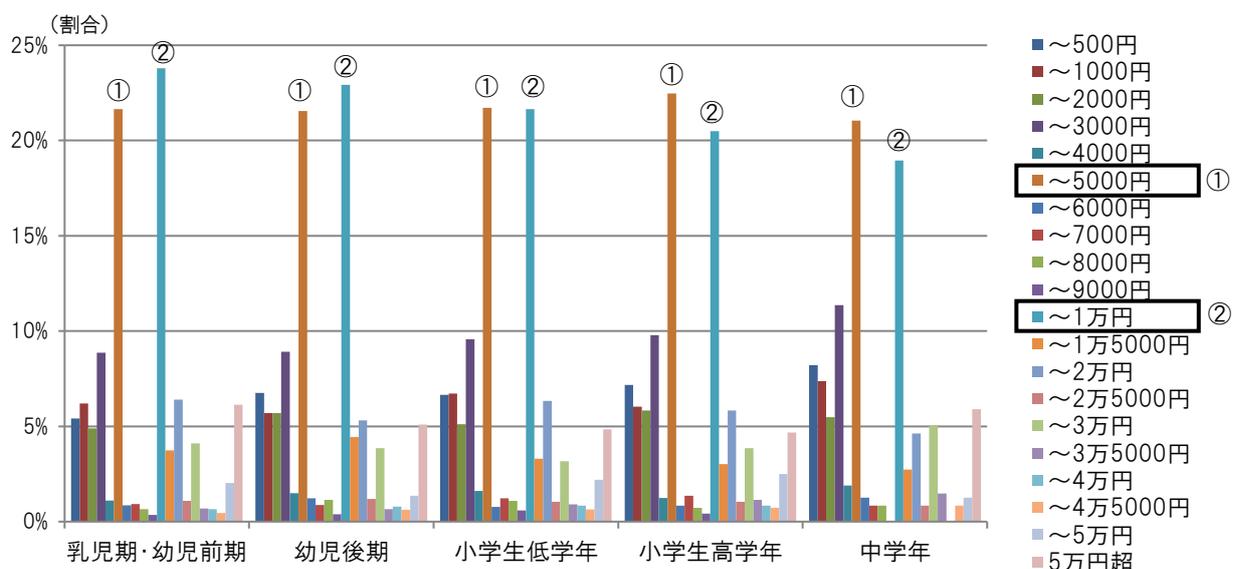
賃貸・共同住宅（RC造）は、全住宅での傾向と類似している。

低層の賃貸・共同住宅（木造・S造等）では、乳幼児期では「7：子供の様子を把握しやすい間取りの工夫がある」が第5位に挙げられており、また乳児後期では「40：安心して遊ばせられる公園が近くにある」も重視される。さらに、小学校では「35：住宅周辺の交通安全性が高い」が上位にくる。

### 3. 2. 4 重要項目を満たすための住居費の追加負担可能額

ウェブ調査において、「住居費をかけても重要・必要」と思う上位3位までの項目を現住宅が満たしていない場合、それを満たすために現住居費に月額でいくらの追加負担が可能かについても調査した<sup>注2)</sup>。

子どもの年齢期別に月額追加負担可能額の分布を示したのが図参考3.7である。なお、負担額は自由記入ではなく、図に示す費用区分を設定して示し回答を求めた。また、住宅タイプ別の分析もしたが、有意な差は見られなかったため、全住宅での傾向を示す。



図参考3.7 重要項目を満たすための住居費の追加負担可能額（子どもの年齢期別）

いずれの年齢期でも月額「4千円以上～5千円未満」、「9千円以上～1万円未満」の両者にピークがくる。ただし、長子が幼児後期までは「1万円未満」が最も多く、小学生低学年で両者がほぼ拮抗し、小学生高学年以降になると「5千円未満」が最も多くなる。長子年齢が上がるにつれ、教育費等の他の支出が増えることや子どもの数が増えると考えられることから追加負担額は減少の傾向にある。しかし、子育てに重要と考える住宅・居住環境を満たすために、月額1万円程度までの住居費負担の追加をできる世帯が一定数存在する実態が示される。

### 3. 3 調査結果からみる「子育て配慮住宅の計画手法」の検討の視点

上記の子育て世帯が子育てに配慮した住宅及び住環境の要素として具体的に重視する内容（項目）についてのウェブ調査の結果を踏まえ、『子育て配慮住宅の計画手法』の検討における視点を整理すると、次のような視点が必要と考えられる。

#### （１）子どもの年齢期に応じた配慮事項・重要度の検討・設定

子どもの年齢によって、子どもの住宅内外での行動範囲や行動パターン、親（保護者）による見守りの必要性の程度等は大きく異なり、子育て中の親（保護者）が重要と評価する項目は子どもの年齢によって大きく異なる。

ウェブ調査において、次のような傾向が具体的に明らかになった。

- ① 乳児・幼児期では「住戸内の転落防止」、「危険箇所への侵入防止の工夫」等の安全性に関わる項目や「遮音性の高さ」など、住宅や住環境の安全・快適に関する多岐の項目が重視される。また、医療機関や子育て支援施設への近接性も重視される。
- ② 住まいや居住環境の安全性や快適性に係る項目は、子どもが乳児期から小学生低学年くらいまでの年齢期で特に重視される傾向にある。また、小学生以降になると小・中学校等の教育機関への近接性が重視される。
- ③ 小学生高学年以降になると、「子どもの個室」の確保が特に重要とされる。また、子どもひとりでの外出も増加し、子どもの行動範囲が広がることから、「住宅周辺の防犯対策」も重要視されるようになる。

このような子どもの年齢期によって親（保護者）が重要と評価する項目の違いを踏まえて、子どもの年齢期に対応した計画上の配慮事項についての検討が必要である。また、年齢期ごとの子どもの行動範囲や行動パターン、事故の発生リスク等を踏まえつつ、各配慮事項について年齢期に対応した重要度の設定をすることが必要と考えられる。

#### （２）住宅のタイプと世帯の居住パターンとの組み合わせ類型ごとの配慮事項・重要度の検討・設定

子育て中の親が重要と評価する項目は子どもの年齢期によって異なることに加えて、子育て世帯が居住する住宅のタイプ（所有形態・建て方等）も子どもの年齢（世帯のライフステージ）により異なる傾向にある。

表参考 3.13 は、平成 25 年住宅・土地統計調査を用いて、全国における世帯類型別の住宅所有関係の分布を示したものである。表中、最も多い住宅所有関係に濃い網掛け、次に多いものに薄い網掛けをしている。マクロ的にみると、子どもの年齢による世帯のライフステージと住宅所有関係の間には、次のような傾向が認められる。

- ① 子ども（第一子）の年齢が「3 歳未満」では借家、「3 歳以上」になると持家が一番多い住宅タイプとなる。
- ② 子どもの年齢が「3～5 歳」くらいまでは借家層も比較的多く存在する。すなわち、子どもが小学校入学までを契機に持家に住み替えをする世帯が主流を占める。
- ③ 子どもが「10～17 歳」での借家（住み続け）層のボリュームは、持家（住み替え）層の 1／3 程度である。

表参考3.13 子どものいる世帯の世帯類型別の住宅所有関係の分布（全国）

単位：千世帯

世帯類型	持家	借家						
		借家 合計	公営	UR・ 公社	民営 合計	民営・ 木造	民営・ 非木造	給与
総数	32,166	18,519	1,959	856	14,582	4,383	10,199	1,122
3人世帯	6,796	2,354	291	130	1,786	624	1,162	147
夫婦と3歳未満の者	321	643	15	20	552	142	411	55
夫婦と3～5歳の者	240	210	10	9	173	48	125	19
夫婦と6～9歳の者	250	135	10	6	106	33	73	13
夫婦と10～17歳の者	611	223	25	12	166	60	106	20
夫婦と18～24歳の者	678	159	24	11	112	45	67	12
夫婦と25歳以上の者	3,781	398	85	43	256	138	118	13
その他	861	566	119	29	405	154	251	14
4人世帯	5,411	1,478	187	70	1,081	410	671	141
夫婦と3歳未満の者	48	70	3	2	57	18	40	8
夫婦と3～5歳の者	315	264	18	9	208	64	144	30
夫婦と6～9歳の者	564	243	21	9	184	63	121	29
夫婦と10～17歳の者	1,276	356	47	16	251	96	156	41
夫婦と18～24歳の者	808	174	29	10	119	47	71	17
夫婦と25歳以上の者	1,655	163	26	15	114	60	54	7
夫婦と18歳未満及び65歳以上	144	10	1	1	8	4	4	1
その他	559	186	40	16	132	56	76	39

出典：「平成25年住宅・土地統計調査（総務省統計局）」をもとに作成

こうした子どもの成長に伴う世帯の住み替えパターンを踏まえ、住宅のタイプごとに入居する世帯のライフステージを想定した計画上の配慮事項やその重要度の検討・設定が必要である。例えば、子どもが小学生になる頃を機に住宅タイプや親が重要と評価する項目の傾向が変化することから、次の①～③のような世帯の基本的な居住パターン（住み続け・住み替え）を設定し、住宅タイプとの組み合わせによる典型的な類型ごとに注3)、計画上の配慮事項の重要度を設定することが必要と考えられる。

- ① 子どもが乳幼児期に入居し、住み続ける。  
→ 入居時の住宅タイプとして、持家（戸建住宅、共同住宅）、賃貸共同住宅（RC造）を想定。
- ② 子どもが乳幼児期に入居し、子どもの成長に応じて（例えば、小学校入学を機に、個室を求めるようになる小学校高学年以降に）住み替えをする。  
→ 入居時の住宅タイプとして、賃貸共同住宅（RC造）、賃貸共同住宅（木造・S造）を想定。
- ③ 子どもが小学生期に入居し、住み続ける。  
→ 入居時の住宅タイプとして、持家（戸建住宅、共同住宅）を想定。

注

- 注1) 「住居費をかけても」とは「月々の住宅ローン返済額（持家の場合）や家賃（賃貸住宅の場合）が高くなることをいう。」ことを明記して調査した。
- 注2) 追加負担可能額は自由記入ではなく、図参考3.7の凡例に示す費用区分を設定して示し回答を求めた。なお、住宅タイプ別の分析もしたが、有意な差は見られなかった。
- 注3) 参考資料2で説明したA社の評価基準（表参考2.7）においても、0～4歳の乳幼児がいる世帯を中心的に想定して基準を設定している一方で、子どもが小学生の世帯についての基準も別途用意している。